# みなレポ

## 6周年記念福興市が盛大に開催

4月30日（日）、志津川仮設魚市場で志津川湾ほやまつり福興市が開催されました。開催から6周年を迎えた福興市。震災の一月後に第1回目が開催され、今回で67回を数えます。まつりのメインは、南三陸特産の「ほや」。この特産のほや詰め放題には、大勢の人が集まり、あっという間に完売になるほど、人気を集めていました。

仙台から訪れた夫婦は、「昔はサンオーレそではまや潮騒まつりに子どもを連れてよく来ていました。今回初めて福興市に訪れましたが、いいですね」と話していました。

## ツツジ咲く田束山をマウンテンバイクで駆け抜けた

5月14日（日）、田束山で第23回たつがねMTB（マウンテンバイク）大会が開催されました。本大会は、当時歌津中学校で英語指導助手（ALT）をしていたブライアン・マーティンソンさんが大会を発起し、平成7年から開催。参加者は、県内はもとより遠くは東京や愛知から総勢90人の参加申込がありました。

当日は、小雨が降り、霧がかかったあいにくの状況でしたが、選手たちは、花開いてきたツツジを横目に一生懸命ペダルをこいでいました。

## おいしいね、しろうお

5月14日（日）、「つつじ満開！しろうおまつり福興市」が南三陸ハマーレ歌津で開催されました。今回の福興市のメインは、しろうお。この日は、しろうおの踊り食い体験や、すくい体験などの企画が催され、人気を集めていました。気仙沼市から来た佐藤海くん3歳は、生のしろうおを食べて「おいしい」と話しました。海くんのお母さんによると、これまで刺身も食べさせたことがなかったのに、しろうおを食べて驚きの様子でした。また、角田市から来た夫婦は「初めて生のしろうおを食べました。茹でているのとは違い、おいしいですね」と話しました。

福興市と同時に「南三陸HOPE FESTIVAL」が開催されました。このホープフェスティバルは、“音楽のある町を取り戻したい”という思いを込め、地元有志が平成23年から始めたものです。ステージでは、バンド演奏はもちろん、音楽を中心とした楽しい企画が催され、会場は大いに盛り上がりを見せました。



南三陸なうな人

# スキルを生かして町の描く未来に貢献！

【佐藤和幸さん】

「プロジェクトで開発するモバイルハウスに住み、ASC認証の牡蠣を食べながら、ワインを飲んで暮らしたい」と話す佐藤さん

福島県新地町出身の佐藤和幸さん。地元企業を早期退職後に進学した法科大学院在学中に東日本大震災が発生した。「勉強をしている場合ではない」と学校を休学し、既に資格を持っていた行政書士として開業。故郷福島県で、原発被害者に対する損害賠償請求書の作成支援を担った。

経理・財務・総務など事業運営にとって欠かせないスキルをもつ佐藤さん。これまで福祉施設や温浴施設、飲食店、六次産業化などさまざまな分野の新規事業開発のサポート役として各地で活躍した。

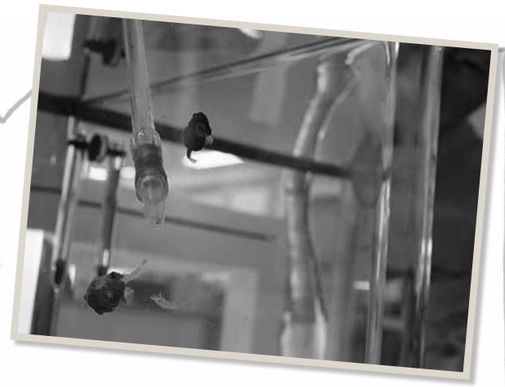
南三陸町との出会いは今年2月。フィールドリサーチツアーで地域資源を生かした事業を巡った。「循環型社会の取り組みがすごい。ツアーで出会った熱い想いをもつ町民と仕事ができたら面白いな」と感じたと話す。

わずか2カ月後、佐藤さんは南三陸に移住した。南三陸で立ち上がった持続可能な社会作りに挑戦するプロジェクト「Next（ネクスト） Commons（コモンズ） Lab（ラボ） 南三陸」。佐藤さんはその事務局として全体のサポートを行う。頼もしい参謀を得たプロジェクトは、南三陸の目指す未来に向けて大きな一歩を踏み出した。

南三陸なう　検索　佐藤さんをもっと詳しく知りたい人は、南三陸公式ブログ 南三陸なうをご覧ください。

ネイチャーセンター準備室だより

## 「魚たちのお食事タイム」



役場1階に展示中の水槽の中には、クチバシカジカやダンゴウオの他、南三陸の海に生息するさまざまな種類の生き物たちがいます。背びれが大きくオレンジ色が美しいオコゼカジカや、水槽の中で子育て中のヒメフタスジカジカ（オスが卵を世話します）、恥ずかしがりのヤドカリの仲間などがちょこちょこと動き回っています。彼らへの餌は南三陸で水揚げされたイサダ（オキアミの一種）です。口元にイサダを置くと、魚たちは一気に丸のみにします。食事タイムは週3回（月、水、金）夕方5時ごろの予定です。

他にも、水槽の掃除を担当するナマコや巻貝の仲間がいます。時々しか姿を見せないコツブムシ（ダンゴムシに似た甲殻類）や、石の隙間に巣を作って長い触手を伸ばすゴカイの仲間も餌の残りを食べてくれます。また、カンザシゴカイの仲間はきれいなエラを広げて浮遊するゴミをこしとって食べます。南三陸の海を再現したミクロな世界をじっくりとご覧ください。

問 農林水産課 ネイチャーセンター準備室　☎25-9703